

## 第16回 チューリッヒ・バレエ 期待の星

「いつも若い観客が多いのに、今日は何故か年配の人が目立つなあ」その日の公演に招待してくれた友人は、チューリッヒ歌劇場内を不思議そうに見回していた。確かにいつものバレエの客層とは違った雰囲気であるが、その謎は終演後に解けることになる。

『Gods and Dogs』と題されたそのバレエ公演は3作品で構成されている。1つ目は『In the Middle Somewhat Elevated』で、緑のコスチュームに身を包んだダンサー達の動きの美しさを楽しめる演目だ。しかし Thom Willems のエレクトリック・ミュージックは、クラシックの生演奏を聴くのに慣れていない耳にはハードだった。

休憩を挟んで始まった2作目の『Gods and Dogs』は、ストーリー性のある振り付けとベートーヴェンの弦楽四重奏を Dirk Haubrich が編曲した音楽で、エレクトリック・ミュージックで硬くなった耳と体をほぐしてくれた。そこで主役を演じていたアジア人男性は上手であったが、「中心になって踊る実力のあるダンサーはこうあるべき」と納得し、その時はまだ心を動かされるほどではなかった。

最後の作品『Minus 16』は休憩中からダンサーが舞台上に立ち、無言でパフォーマンスを始めて休憩から戻った観客達の笑いを誘っていた。その笑いでほぐれた体に、ヴィヴァルディのパロック音楽からシヨパン、そして現代のポップスまで多彩な音楽が染み渡り、体の底から踊りたい衝動に駆られてくる。そんな観客の内なる欲求が頂点に達した終盤、ダンサー達が客席からアトラダムに素人のパートナーを探して舞台上に連れて行き、一緒に踊り始めるというサプライズが待っていた。

そのパフォーマンス中に驚くべき現象が起こり始めた。『Gods and Dogs』で主役を踊ったアジア人がこの作品ではグループの中で踊ったのだが、彼にだけスポットライトが当たっているかのように輝いているのである。最後には彼しか目に入らないようになり、彼がどこにいても目で追いかけてしまうのである。幕が下りても、再度幕が上がる時には、さっき彼がいた場所に目を自然にスタンバイさせている自分がいた。

終演後はまるでブロードウェイでミュージカルを観た時のような幸福感を胸に、微笑みながら客席を後にしてクロークへ向かうと、他の観客も高揚しており、顔に紅をさしたように感じられる。先ほどまで舞台上と一緒に踊っていた年配の女性など完全にハイテンションだったが、全員が最低4〜5歳若返って歌劇場を後にしたのではないか。ここで冒頭の謎が明らかになった。きっと年配の観客達は口コミで、このポジティブなエネルギーを充電しにやって来たのだろう。

そのテンションは私の中で翌日も続き、例のアジア人ダンサーの面影が脳裏から消えず、別件でコンタクトを取ったプレス担当者に「彼は何者なのか、日本人ならば是非インタビューしたい」と申し込んでみた。彼の名は福士宙夢(すむむ)君、21歳。チューリッヒのジュニアバレエで2年踊った後、今年からメインダンサーに昇格している。毎日10時から18時まで稽古という多忙なスケジュールの中、偶然空いた時間に彼にインタビューすることができた。

▼ ▼ ▼  
物心ついた時から踊るのが好きで、3歳でマイケル・ジャクソンにはまりムーンウォークにトライしていました。長野オリンピックではフィギュアスケートが気に入り、真似しながら畳の上でグルグル回ったり・・・そんな様子を見た親が「この子にはバレエを習わせるべきだ」と地元のバレエ教室に連れて行ってくれ、男子クラスに入って友達

と遊びがてら小学1年生まで通っていました。その後クラシックとモダン両方を習い始め、週3回はバレエに通う生活をしていましたが、まだ友達と遊ぶことが優先でした。そのモダンダンスの先生に気に入られ、東京新聞主催全国舞踊コンクールに出てみると、小学生部門で1年生の僕が1位になったのです。それで翌年も同じコンクールを受けたら2位になってしまい、悔しくて3年生でまた1位に返り咲き、そこで満足してコンクールに出ることはやめました(笑)。

その後は東京バレエ団のバレエ学校に入学しましたが、小5の時に三島由紀夫を題材にした作品『M』の少年役で舞台に立つ事ができました。それでも当時の夢は、まだ「サッカー日本代表」でした(笑)。バレエダンサーになるという選択肢が、無意識に恥ずかしかったのかもしれませんが。小6の卒業アルバムで初めて「バレエダンサーになりたい」と公言しています。そして中学生の頃、動画でダニール・シムキンの踊る『ドン・キホーテ』を観て衝撃を受け、自分は「彼のようなダンサーになりたい」と確信を持ちました。

17歳の時ユース・アメリカ・グランプリを受け、それを観たモノコのプリンセスグレース・バレエアカデミーの校長から奨学金オファーをもらいました。それ以前にもヒューストンとドレスデンからのオファーがありましたが、モノコの評判が一番良く、コンテンポラリーも学べることからこの学校への留学を決めました。

モンテカルロは、最初は綺麗でよかったです。小さい街なので3日後には飽きてしまいました(笑)。寮生活は規則が大変厳しく、門限は9時半! 部屋に食べ物を持ち込んではいけなかったので、空腹に耐えられない時は友達とピッツァを食べに行ったりしていました。

チューリッヒに来たのは、モノコの校長とチューリッヒ・バレエのディレクター、シュブックが友人でオーディションを勧められ、2013年にチューリッヒ・ジュニアバレエに入団できたからです。ここは18歳以上の若手が約15人所属しており、2年間修行できます。その後、運良く現在約35人いるメインダンサーの1人になれましたが、1年契約を毎年更新していくシステムなので頑張らないといけません。

チューリッヒはとても住み心地がいいです。小さい街なのに何でもあり、少し郊外に行けば自然も楽しめます。自転車でもどこでも行けるし、トラムも便利で気に入っています。

▲ ▲ ▲

来年の2月には、次の夢が叶うかどうかの結果が出るそう。6月には初めてコレオグラファーに挑戦する。将来到達したい夢を追うよりも、今を頑張りと、今を楽しみたいと語る。だから彼の踊る姿を観ると楽しくなるのかもしれない。

体の底から細胞の活性化をお望みの方は、以下の処方箋をお試し下さい。福士さんのダンスを通して、これから訪れる寒い冬にもビクともしないエネルギーが伝染します。

【チューリッヒ・バレエ団公演】 於チューリッヒ歌劇場

**Gods and Dogs** 12月27日

大好評につき特別再演。16歳以下 CHF20

**Restless** 12月20日〜 7回公演(福士さん出演演目はSkew-whiff。

10〜12分の作品で、男3人女1人のコメディ)

**Gisele** 12月17日、1月2日(1幕でパ・ドゥ・ドゥを踊る)

**Silvester Gala** 12月31日 Le Bourgeois(シャンソン歌手ジャック・ブレルの歌をバックに踊る。目標ダンサー、シムキンのおはこ)

